

## まえがき

本書の題名「真実心」は、光華女子学園の校訓であり、建学の理念（精神）を端的に表わすものであります。

では、「真実心」とは何でしょうか。それは、親鸞聖人の「浄土文類聚鈔」によれば「如来の清浄広大の至心」であるとされ、一般に「如来の心」、「如来を信じる心」であると言われます。私にはそのことをまだ確信を持って理解することができませんので、なかなか信じるというところまでは至らず、いろいろと理屈を考えては苦しんでおります。

真実心Ⅱ「真実の心」にいう真実とは、この世の真の姿のことであり、我々を包む宇宙の真の姿Ⅱ宇宙の摂理Ⅱ我々の住む「相對の世界」を超える「超越の世界」、あるいは我々の理解できる現実の世界をも包み込んだ「絶対の世界」のことではないか、などと空想しています。

宇宙はビッグ・バーン（大爆発）で「無」から生じたとされ、ものすごい勢いで膨張し続けているとも言われます。学長講話及び本書の中で、私はそれは嘘ではないかと言っています。それは、大爆発の前にも空間があったはずだと考え、宇宙の外にも空間がなければ膨張し続けることはできないと考えていたからであります。でも、最近読んだ宇宙科学の本の中では「大爆発の時に時間と空間が同時に生じた」と書いてありましたから、時間のみならず空間もその時に生じたのだとすれば、それ以前には空間がなかったことになります。そこで今は、それ以前の「無」とは何であったのかということの意味付けに困っています。

私たちが住んでいるこの世の中は「相対の世界」であり、また認識可能な物質・物の存在する世界であります。物質や物体の間には空間・隙間（「無」を含む）も存在する世界であります。従って、宇宙創世以前の「無」の世界とは非物質の世界（物質・物体のない世界）、あるいは全く容積のないエネルギー又は「ちから」が均一に充満した無限の世界（均衡のとれた、動きのない、時間も空間もない、静寂の世界）ではなかったのか、と考えています（完全に、あるいは純粹に「無」の世界であった

ら、爆発の力も出てこなかったのではないでしようか。それは、無限の世界であり、超越の世界であり、絶対の世界であり、はたまたそれが「阿弥陀の世界」|| 「如来の世界」ではなかったのか、とも思います。それがあつた時、力の均衡を失つて凝集と反発（拡散）を繰り返し、その相互作用の中から質量のある物質（物体）を生じた結果、空間のある「相対の世界」が生じたのではないか、その物質や物体は再び均衡のとれた「絶対の世界」に帰ろうとして（あるいは均衡を回復しようとして）凝集と反発（拡散）を繰り返し、宇宙の星々の生成消滅を促し、また地球上の自然的条件の中から生命（いのち）を生み出し、それに「絶対の世界」（普遍性・完全性・永遠性を持った世界|| 無の世界|| 如来の世界|| 仏の世界）に回帰しようとする宿命を背負わせているのではないか、などと妄想しています。

そうであれば、私たちの現世における物理的・物質的・物欲的な営みは「無常なもの」であり、いずれは絶対の世界（無の世界・超越の世界・如来の世界）に帰すべき空しいものであります。しかしながら、それが空しくても、私たちはその「生きる営み」を避けることのできない宿命を背負つて生きていくことになります。そこで、そ

の宿命から来る苦しみを救えるのは、親鸞聖人の言われるように、「他力」＝絶対無限の力＝阿弥陀如来の慈悲のみであり、それを信じて「南無阿弥陀仏」と称えるしかないということになるのではないでしょうか。

二〇〇一（平成一三）年一月三十一日

光華女子大学・  
同短期大学部

学長 高木英明